ユールの調香師

冷たくも穏やかな甘さを含んだ、森からの風がユールを吹き抜ける。

針葉樹と、黒い土の匂い。私は分厚いコートの襟元を片手で掻き合わせてから、片方の手に持っていた大きな籠を両手に抱え直し、ゆったりとレンガ道を歩く。籠に入っているのはパンとチーズ、赤ワイン。大通りを何度か往復してあれこれ吟味しているうちに遅くなり、街にはいつの間にかポツポツとオレンジの灯りが、石造りの壁やレンガ道に幻想的な陰影を生んでいる。

雑貨店のウィンドウを覗くと、オーナーのヤンヌはクリスマス雑貨に埋もれていた。

「こんばんは、ヤンヌ」

「こんばんは、アーダ！ 今年は何を飾る？ リンゴの実、聖霊の飾り、星、ああ、でもオーナメントはもうずいぶん揃っているのでしょう」

ヤンヌが次々に差し出す品の中から、私は二、三のガラスオーナメントを選び取った。それから、花弁や木屑が練りこまれた蝋燭も。彼女の用意する品は、いつでも私の気に入るものばかり。仕事に使う万年筆やノートも、香炉もここでいつも揃えている。

温かな気持ちで店を出て、大通りをまた歩いて戻る。聖夜に向けて、クリスマスらしい色や形がユールの街を彩っていく。もみの木、ヒイラギ、赤いりんごの実、そしてユールに伝わる聖霊を模した木彫り、金色の星飾りがあちこちに下げられる。聖堂からは微かに賛美歌の練習が聞こえる。彼女達の歌声があの聖堂の天井から星のように降ってくるミサの夜が待ち遠しい。花屋のユーリアが店先の椅子に座って、蔓を束ねて木の実やひいらぎを丁寧に織り込んでいる。幸せを呼ぶ魔除けの花綱が、これから街の至る所に飾られていく。もちろん私のアトリエにも。

「アーダ！ 元気？」

小さなカフェの小窓からノーアが顔を出す。赤い果実の香りがふわり。

「プラムたっぷりのクリスマスプティングを、たくさん包んでいたところよ」

私の大好物！ 今年もコインが当たるかしら。

大通りをまたゆったりと歩く。荷物が少し重い。ふと、近くを歩いていた誰かの残り香だろうか、私の鼻を、カルダモンの香りが通り抜けた。目を閉じ、香りを捕まえて、分けてみる。これはいつもの楽しい遊び。カルダモンの他には、レモン、そして黒胡椒、そしてプチグレンとサンダルウッド……、なんだか美味しそうだけど……。かすかに、神聖な香木の香りが……。

ミーリャ。ミーリャがここを通ったの。

私は通りの先を見遣ったが姿は見えない。足が速くて、いつだって風のように香りだけを残していく。この香りは、たぶん私が去年作ったもの。

カルダモンの香りで少し空腹を覚え、私は家路についた。

二階の自宅で夕飯を済ませて、大通りに面した一階の店舗へ降りる。店舗の奥は洞窟のような雰囲気のアトリエになっており、とても居心地がいい。このアトリエには、クリスマス前になると「香りの小瓶」のオーダー品がずらりと並ぶ。この十五年間、いつでもたくさんの小瓶が並んでいるのだけれど、ここまで多く並ぶのはこの時期ならでは。他の調香店ではどれくらいオーダーがあったのだろう。ちょっと気になるけれど、なかなか訊きにくいのも確か。「ユールの調香師」が記事になったこともあって、数年前からどんどん街の外からのお客様も増えている。そろそろ私も手が足りなくなってきたし、来年は誰か雇わなくちゃいけないかしら……。

調香ノートに書かれた相談メモを確認しながら、出来上がった香りの小瓶を一つずつ確かめていく。

近くで働く友人達のオーダー品もたくさん並んでいる。自分で使うものもあれば、贈り物にする人も多くいる。

- 聖歌隊のサッリ……サンダルウッドを好む。ベルガモット、白い花を合わせて。
- 本の収集家ユウミ……明るいパルマローザで自信を取り戻せるよう。
- 記者のレンニ……ローズ、ゼラニウムを。「まだ見ぬ女性へ、巡り合ったときの贈り物として」と希望。とてもロマンチスト。
- 助産師のマリヤ……「アーダのお任せで」。とても光栄。いつものジャスミンの香りをアレンジして。
- 眼鏡屋の青年エルッキ……ベルガモット、ネロリ、スパイス、シダーも必要。複雑で、洒落た香りを。彼は近頃、独特なスパイスや樹脂を使ったブレンドを好む。どんな香りもスマートに纏えそう。
- 介護士のカウコ……年老いたお母様への贈り物。とっておきのブルガリアンローズを。
- 会社勤めのアンヤ……イランイラン、ベンゾイン、バニラ、柑橘。いつも朗らかにお喋りをし、甘い香りをオーダー。私も甘い香りが大好き。

遠い国からフィールドワークにやってきているミーサは、ユールに自生する針葉樹の清々しい香りに感激し、ぜひ使って欲しいと言っていた。ミーサの故郷にはどんな香りがある？ そう尋ねたら、夏蜜柑が好きだと言う。彼女の国の夏蜜柑に似た香りを探し出し、針葉樹と合わせたら、とても良い組み合わせだった。

あなたのお任せで、と電話でオーダーを済ませたのは、子育てと仕事に多忙な小学校教

師のアイノ、早朝から遅くまで仕込みで手が離せないパン屋のマイユ。疲れを取り除くような香りを。

私は清潔な手袋をはめ、調香ノートと瓶に結えたメモを照らし合わせ、いったん栓を抜き、一つずつ香りの育ち具合を確認する。そして瓶を丁寧に磨き、美しい紙で作られた貼り箱に納めていった。

冷たく冴え渡る街の空気には、かすかに冬の匂いが混じっている。私は店の二階の居間にもみの木を運び入れ、オーナメントを飾った。

さあ今年も、特別な贈り物を作ろう。

本当は皆の小瓶と同じように、しばらく寝かせてから贈り物にするべきだけれど、自分の分はどうしても後回しになってしまうし、これに関しては直前になってから作る方が、良いものができる気がする。

私はいつものように、薄暗いアトリエの中央に立って、目の前に整然と並ぶ天然の植物香料をざっと眺める。これらはすべて命あるものが生み出した香り。私は動物性のアンバーやムスクを使わない。合成されたものは使わない。私は分かっている。これでは多くの人が望むような、より重厚感と保留性のある、深みのあるバリエーションを生み出すのは難しい。なぜなら植物の香油はとても軽やかで、透き通っていて、心を満たしたかと思うと、やや余韻を残して、思ったよりも早く消えて行ってしまうから。それでも、それが最も清浄で、美しいとされているし、私もそう信じている。今はこれで良い。いつか手法は変わるかもしれないけれど。少なくともユールの人達もユールの聖霊も「アーダの香り」を好きでいてくれる。

さあ、始めましょう。香料瓶からピペットで濃厚な香油を取り出す。試香瓶にひとつずつ移し、試香瓶をひとところに集めたり遠ざけたりしながら、調合していく。香りは目には見えない姿で私の中に入っていくけれど、確かに私の体に反応を起こす。香りを確かめる度に、体の中に小さな白い花が咲き、瞬く間に果実が成り、果皮が弾けるように香りが広がっていく。そうかと思うと、いつの間にか針葉樹の真っ直ぐな幹が伸び、森が生まれていく。私の体の中に森が大きく育ち、清涼な空気を吐き出し、重たい樹脂を垂らして体の中に溶けていく。作業中はあらゆる記憶が蘇り、情動が揺さぶられる。こんな素晴らしい遊びはない。私だけの秘密の遊び。ビターオレンジ、クローブ、そして……。混ぜる前から分かる。きっと良い香りが出来上がる。感覚で選び取った香油を集めて、乳白色の陶器に流し込む。これで本番用の香油の出来上がり。そしてもう一つ。そこから半分を計り

とり、今度は茶色のガラスの小瓶に満たされたウォッカに一滴ずつ、落としていく。緑色や黄色が混じり合い黄金色に見える濃い香りの粒は、一瞬の煌めきを放ったかと思うと煙のようにゆらめき、とろけた飴のように広がり溶けて、ウォッカはすっかり香りに満ちた液体となった。

十二月二十四日。ミサまでまだ時間がある。

私は儀式用の衣装を纏った。

この祭服は、司祭のものよりも簡素ではあるけれど、真っ白なワンピース状で、手首と裾に黄金色の糸で複雑な刺繍が施されている。ユールの聖霊を祭る者の伝統的な文様。上に羽織る細いローブは、とても古いもの。祭服は数年に一度新しく注文されるが、ローブは代々受け継がれてきたものを使う。私は五年前に受け継いだローブを捧げて持ち、優しく自分の肩に載せた。

真っ白なレースの手袋をはめて、小瓶を手にし、暖炉の前の揺り椅子に腰掛け、とろりと光る、その茶色い瓶を蝋燭の光で透かして中身を眺める。ビターオレンジ、クローブ、セージ、ベルガモット、ライム、様々な白い花、そして乳香と没薬が溶け込んでいる。私は瓶の蓋を取り、胸元、そして、手首に少しずつ吹き付けて、テーブルに小瓶を置く。そして深く息を吸い込んだ。全身から力が抜ける。しばらく瞑想するようにじっと目を瞑り、香りを体に取り入れていく。次第に木々の呼吸音や、花のささやき、歌声を聴いているかのような心地になり、そして目の前には鮮やかな景色が浮かんだ。香りはただ「香り」であるだけでなく、生き物の音であり、色であり、そして、自然すべてに宿る聖霊そのものだ。だからミサに出かける前に、香りを予め身に纏っておく。

体は徐々に現実を取り戻し、呼吸が整った。目を開けると思考は鮮やかになり、はっきりと世界が見えている。

この特別な香りの小瓶は、儀式に必要なものでもあるけれど、一年中誰かに香りを贈り続けた自分を労う、自分への贈り物でもある。だから、好きな香りを調合して良い。どこにも調合のルールは定められていないのだから。ただ、古い薫香である乳香と没薬は慣習的に使われてきた。二つとも私の大好きな香りで良かった、と思う。

迎えのベルが鳴った。私は椅子から立ち上がり、紐で腰を緩く絞って祭服の裾を整える。

そして香油の原液を注いだ乳白色の陶器に、しっかりと封をして、厚いリネンの袋に収め、大切に両手で持ち、教会へ向かった。

教会までの道筋に無数の蝋燭が置かれ、火が揺れている。夜空は厚く曇っているけれど、星空が見えるような気持ち。街はたくさんの人出なのに、とても静か。

足元を柔らかく照らされて、私は導かれていく。

「ユールの調香師、聖霊ミーリャへ香油を」

高い天井から聖歌隊の澄んだ声が降ってくる。
厳かな歌に皆が包まれて、祈り、手を取り合って歌い、樫の木をくべた。
私達は永遠の太陽を祈る。そして、聖霊が祀られた小さな祭壇の前に私は一人進み出て、
静かにひざまずき、香油をそっと樫の木に垂らした。

【了】